

資料室だより 155

戦後の日本の教会音楽の歩みにおいて大きな働きをなさった方を3人挙げるとすれば木岡英三郎(1895-1982)、ロベール・ヴリーゲン(1928-2005)、そして当研究所の所長であられた橋本周子(1937-2024)を迷いなく推奨します。他にも多くの方々が教会音楽に貢献されましたが、私がたまたまこのお三方の遺品となった蔵書整理に携わっている関係であえてここにご紹介させていただきます。残された書籍や楽譜から故人の息吹が強く感じられます。そして私達教会音楽を愛する者、それに携わる者の間で今もなお生きて息づいておられると感じるのです。ヴリーゲン氏は音大生にもすでに世に出ている演奏家、音楽教師、また日常生活において新しい理想、善と美を求める音楽愛好家にも教会音楽の研究と演奏を勧めたいと書いておられます。「グレゴリオ聖歌の旋律性、モテットのポリフォニー的対位法的作曲の表現力、ミサ曲の音楽的形式の統一性による充実、オラトリオ、カンタータなどにおけるアリアの声楽的魅力、その歴史的発展に見られる器楽法。これらの音楽は常に人間の精神生活や理想を指標し、またそれを実現しようとする人間の喜びや悲しみと深いつながりを持っています。経済面のみにおける成功に不満を感じるテクノロジーの欠点が認識される我々の現代社会において多くの人が、より自然でより人間性のある正義、愛、美によって導かれる理想の実現を望んでいます。音楽芸術作品のなかで特に上述の音楽(教会音楽)はその純粋な音楽性、また精神性においても現代社会にとっては大きな意義と救う力も持っています」(大阪パレストリーナ・インスティテュート、パンフレットより)

私がグレゴリオの家で資料室司書となるために面接をしたときに橋本所長もほぼ同じような内容のことを話されました。殺伐とした現代社会における教会音楽の果たす役割、人々を潤す水脈とならねばならないという教会音楽家の使命は共通していました。橋本所長の残された諸資料に関してましては今後順次ご紹介していきます。

一方、木岡氏は教会で奏楽にかかわる人々には、書店でいつも手に入る日本語の楽譜の編纂者というイメージで馴染みがあるかと思いますがベーレンライターなどの良い学術的なエディションが出るようになってからはオルガンの専門家を目指す方々の視野には入ってきません。しかし彼は総合的な視野をもって教会音楽に打ち込んでおられました。木岡氏が編纂したカルヴァン派詩篇曲集の序文を読みますとそこには火を吐くような激しい言葉が並んでいます。彼は戦争を挟んで巨人のような精力的な働きをなされ、オルガニストとしてだけではなく総合的な教会音楽家として情熱と使命感にあふれています。「カルヴァンのこの聖歌は日本にとって何を意味するでしょう？ 神学と音楽に、一致と等しい尊厳を見抜く力のあった靈智があり、熱い愛情と最も完璧な表現力を残した改革者たち(カルヴァン派のこと)は詩と賛美と霊の歌の聖化そしてその救いを求めて号泣しています、日本民族の永遠の救いとその歌が叫び求められ見出されるように！」木岡氏の文章はどこを切っても熱い血が迸り出るような気迫があり、なまぬるい気持ちではられません。

杉本ゆり 記